

## 近い者とされた幸せ

2007. 11. 6 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

### 引用聖句

エペソ人への手紙 2章13節から15節

しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまな規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、

ドイツのアウトバーンの標識に、ドイツ語ではなく英語で書かれていることばがあります。「SAFETY FIRST—安全第一」。どうして英語で書かれているかちょっと分かりませんが、まあそれくらいの英語でしたらドイツ人も分かるのではないかと思います。もちろんこの標示は、イギリス人、またアメリカ人のためだけではなくて、みんなのために書かれているものです。しかし、この標示にもかかわらず高速道路は決して安全ではありません。毎日のように交通事故で死亡者が出ます。人間は誰も安全を求めます。けれど絶対の安全というものは、なかなかないでしょう。

只今読んでいただきました箇所の中に、「近い者とされた」とあります。近い者とされた人々こそ、まことの平和、また安全を経験しているのではないかと思うのです。ですから、今朝のテーマは、『近い者とされた幸せ』としたいのです。

人間は安全を求めますが、絶対の安全というものは見つからないのではないかと思います。少し逆説的に聞こえるかもしれませんが、「人間の死」ほど確実なものはないでしょう。どれほど生活が保証されていても、遅かれ早かれ誰も「死」を迎えなければなりません。人間は安全を求め、安全を必要とするのですが、現代の特徴は、「不確実性」です。そして、「不確実性」は、不安定と心配をもたらすものです。私たちの問題や苦しみなどに対する本当の答えを、いったいどこに見出したら良いでしょう。言うまでもなく、それは神のみことばである「聖書」の中にだけです。

現代は多くの国民も政治家もあまりにも多忙で、様々な事ごとに心を奪われていますが、本当に関心を持たなくてはならない課題は、「平和と安全」でないでしょうか。

しかし、忘れてならないことは、自分自身の心の中に「平和と安全」がない限り、どんなに力を尽くして世界の平和と安全を築き上げようとしても、それは全く空しいことであり、意味のないことになるということです。ですから、「本当の平和」「まことの安全」は、個人の人格にかかわる問題です。私たちは皆、「まことの平和」を持っているのでしょうか。「まことの安全」を持っているのでしょうか。

言うまでもなく、誰も平和を求め、安全を求めます。たとえば、「職場における安全」「将来に対する安全」「満たされた平和な人生の安全」を願うものです。全く安全であり、確実にありたいということは、人間の願望でもあるに違いありません。

それは人間の願いだけではなく、「主なる神」ご自身の願望であり、みこころなのです。「心の中の全き平安と平和」、良心の呵責に責められることのない「安全保障」を、主なる神は与えたく思っておいでになります。私たちはそれを持っているのでしょうか。「たぶん持っていると思う」と答えるかもしれません。しかし、「平和と安全」「望み」とは、いかなる土台の上に建てられるべきなのでしょう。

空腹な人が夢の中で満腹している時に目が覚めると、前よりも空腹になるでしょう。また、喉が渴いた人が水を飲んだ夢を見て目が覚めると、前よりも激しい渴きをおぼえるでしょう。「世界平和」や「安全保障」のための宗教的、社会的、政治的な指導的地位に着いて満足している人が少なくありません。

主のことは聖書は何と語っているか、それをイザヤ、イエス様、またパウロの証しから聞きましょう。

・イザヤは一文章だけですが、

イザヤ書 57章21節

「悪者どもには平安がない。」と私の神は仰せられる。

とあります。

・そしてイエス様の約束は、ヨハネ伝14章27節。素晴らしいみことばです。

ヨハネの福音書 14章27節

「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」

「わたしは、あなたにわたしの平安を与える」とは、何と素晴らしい約束でしょう。

ヨハネの福音書 8章36節

「もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。」

とイエス様は約束なさったのです。「子」とは、「わたし（イエス様）」です。

・もう一箇所、パウロの証しですが、  
ローマ人への手紙 5章1節

信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。

いつかもう、ではありません。今現在持っているのです。

イエス様の言われたみことばは、気遣いか、空想家か、お笑いか、或いは、本当にその権利と土台を持っているお方かの、どちらになるでしょう。「わたしはまことの平安を与える」。

前に読んでいただきました箇所を、もう一度読んでみましょう。

エペソ人への手紙 2章13節から15節

しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、

「キリストの血によって、イエス様の流された血潮によって近い者とされた」と。

イエス様が、実際贖いの血を流してくださったため、主なる神との平和をもたらしてくださいました。ですから、その権利を持っておられるのです。平和はイエス様の流された血によってのみ、もたらされるのです。

では、「安全」はどのようにしてもたらされるのでしょうか。現在に対する安全及び将来に対する安全は、いかにしてもたらされるのでしょうか。

人間は死ぬべく定められています。この厳粛な事実を否定し得る者は一人もいないでしょう。いったい私たちは、死後どうなるのでしょうか。ある人はこの事実を否定するかもしれませんが、「死ぬと主なる神の裁きを受けなければならない」と聖書は語っています。このことは、無神論者にとっても厳然たる事実となるのです。「本当の安全を持つことができればいいのですが…。また、将来の「死」という恐るべき恐怖から解放されればいいのですが…」と、誰も真剣に考えることではないでしょうか。

この不安にはたしかに根拠があります。私たち人間の心の奥深くには、どうすることもできない悩みが渦を巻いています。それに対するいろいろな手だては、例えば、哲学によったり慈善をしたりすること、或いは、快樂によってといろいろ為されています。

しかし、聖書ははっきり語っています。

ヨハネの福音書 3章17、18節

神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれている。

「信じなかった」という意味は、「信じたくなかった、意識して受け入れようとしなかった」という意味です。

まだ救われていない人たちは、主なる神の裁きを受ける覚悟をしなければなりません。ですから、主イエス様を信じない者は、主なる神の裁きを絶えず恐れているのです。その「絶えざる不安と恐れ」は、すでに裁かれていることの証拠です。誰でもイエス様の贖いのみわざを受け入れなければ、絶えざる恐れと不安とを持ち続けなければなりません。

それとは反対に、イエス様を救い主として受け入れるならば、「絶えざる平和と安全」があります。どうか偽らずに罪を告白し、イエス様のみもとにひれ伏していただきたいのです。イエス様は死んでよみがえってくださったので、「絶対的な平和」と「完全な安全」とを与えてくださるただおひとりの方です。

聖書を通して、私たちは「完全な真理」を宣べ伝えられました。この「真理」によって、私たちは確固不動の確信が与えられています。この確信についての一つの素晴らしいみことばが、ローマ書の8章に書かれています。

ローマ人への手紙 8章1節

今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

「決して」は、決してです。

この確信こそ平和と安全の土台です。平和と安全は、ただイエス様の血によってもたらされるものです。そして、なぜかという問いに対しては、「イエス様の血によってのみ罪の赦しがなされるから」と答えられます。罪が赦されていない者は、本当の平和と安全を知りません。

そのような理由から、私たちは今まで人類の最大の問題である「罪の債務」の問題を考えてきました。「罪の赦し」こそ、最大の贈り物であり、必要な慰めであり、また、生きる希望です。この贈り物に比べれば、他のものは全てとるに足りないほど小さくなってしまいます。

「罪の赦し」は、この世において最大の慰めです。罪の赦しは、全く永遠の希望でもあります。

次に、「イエス様の血」がなぜ全き平和と安全をもたらすかについて、第二の理由を考えてみたいと思います。

この理由は、イエス様の血による「罪に対する勝利」であるからです。罪に対する勝利は、福音の本質的なものです。すなわち、イエス様による十字架における罪に対する勝利こそ、唯一の勝利です。

父なる神は、イエス様が死からよみがえられた事実により、完全な勝利者とお認めになったのです。エペソ人への手紙を読むと、次のように書かれています。

エペソ人への手紙 1章21、22節

すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。

単なる助け手として、救い主としてではなく、かしらとして与えられたのです。

黙示録によると、ヨハネは開かれた天を見て、裁きを受けるにふさわしいお方が、ユダ族のしし、すなわち「イエス様が完全な勝利者」であることを知ったのです。

ヨハネの黙示録 5章5節、6節前半

すると、長老のひとりが、私に言った。「泣いてはいけない。見なさい。ユダ族から出たしし、ダビデの根が勝利を得たので、その巻き物を開いて、七つの封印を解くことができます。」さらに私は、御座—そこには、四つの生き物がいる。一と、長老たちとの間に、ほふられたと見える小羊が立っているのを見た。

5節、「しし」、そして6節、「ほふられた小羊」となっています。

ヨハネは勝利者であるししを見ようとした時、ほふられたと見える小羊が立っているのを見たのです。イエス様は神の小羊となられた時、「罪に対する完全な勝利者」となられたのです。死に対する勝利とは、十字架における主イエス様の勝利に他なりません。

あらゆる勝利は、征服された敵の力、大きさなどによって、どれほどのものであるかを推し測ることができます。ですから、征服された敵の力が大きければ大きいほど、勝利の重要性も大きくなります。イエス様によって征服された敵は、いかなるものだったのでしょうか。

聖書は、その敵が「罪」であると言っています。私たちは皆、「罪」がいかなるものであるかよく知っているでしょう。私たちは自分自身の罪のため、またほかの人々の罪のためにどれほど苦しんだのでしょうか。

しかしながら、誰も私たちの心の奥底にある罪の問題を解決することができません。また、罪の本質が何であるかを本当に知っている人はいません。主なる神だけが、みことばをもってそのことを明らかにしてくださるのです。

主なる神は、「主に逆らう者こそ罪である」と、はっきり言っておられます。罪とは、「主のみこころに従わないこと全て」を意味しているのです。

エペソにいる兄弟姉妹に、パウロは次のように書いたことがあります。

エペソ人への手紙 2章1節から3節

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中であってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちがみな、かつては不従順の子らの中であって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

とあります。

もう一箇所、少し前になります。

ローマ人への手紙 8章7節

というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。

要するに罪とは、全ての被造物の自己決定と自己支配です。実際には、主なる神のみこころに従わず、それを拒み、逆らうことです。すなわち、主なる神が完全な支配を治めておられないところには、どこでも罪が支配するのです。私たちは、主の支配のもとにあるのでしょうか、それとも罪の支配のもとにあるのでしょうか。その中間ということはありません。

アダムとエバが罪を犯したとき、人間は初めて主なる神を否定しました。この主なる神に対する否定は、人間の中から出たものではなく外から来たのです。罪の創始者は悪魔です。悪魔こそ、主に対してあえて否定の態度をとった者であり、主なる神に対して逆らった者です。イザヤは、その罪について次のように語っています。

イザヤ書 14章13節から15節

「あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、いと高き方のように上ろう。』しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。」

とあります。

悪魔は、「私は…しよう」、「私」、「私」、「…しよう」と言いましたが、そのような意志を持つのは、もちろん人格を持った者だけができるのです。

悪魔の意志の中に、神に対する否定の態度が集約されています。全ての罪、主なる神に対する無関心と敵対心は、悪魔から出てきます。ですから、主イエス様は悪魔のことを、偽りの父、主なる神の敵であると言われたのです。

悪魔の存在は、決して童話や抽象的な話、単なる悪い影響などではありません。聖書は悪魔が人格に関わるものであり、この世の君であると言っているのです。いかなる人間も悪魔に立ち向かうことができません。ただイエス様だけが、悪魔よりも偉大なるお方です。そのために、イエス様は悪魔に対して完全な勝利を治めるため、この世に来られたのです。

ヨハネ第一の手紙 3章 8節を読むと、次のように書かれています。

ヨハネの手紙・第一 3章 8節

**罪のうちに歩む者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現われたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。**

この世は悪魔によって占領されたため、悪魔の占領地を滅ぼすため、回復をもたらすため、主イエス様がこの世に来られたのです。その結果、この世の君と生ける神の子である主イエス様という二つの強大なものが対決したのです。

悪魔はイエス様を打ち負かそうとしてみよろを試みましたが、一時(ひととき)たりといえども成功をしなかったのです。イエス様は常に父なる神のみこころをお求めになり、みこころに従われたからです。

このイエス様の証しとは、次のようなものです。ヨハネ伝 5章 19節です。イエス様だけが、「わたしはへりくだっている」とおっしゃることができたのではないのでしょうか。

ヨハネの福音書 5章 19節

**そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行なうのです。」**

「子」とは、「わたし」です。「自分からは何事も行なうことができません」。したくないということなのです。

詩篇の作者であるダビデは次のように書いたのです。もちろん彼もそう思いましたから書いたのですし、証ししたのですが、ある意味でイエス様に対する預言のことばでもあります。

詩篇 40篇 8節

**「わが神。私はみこころを行なうことを喜びとします。あなたのおしえは私の心のうちにあります。」**

イエス様は、悪魔にとって絶対不可侵のものだったのです。悪魔がイエス様を試みたとき、自己決定と自己支配をするように誘いましたが、それに対してイエス様は、はっきり「否」と答えられたのです。アダムが、「否」と言わずに罪を犯したのに対して、イエス様は、「否」と答えて完全な勝利を収められました。

イエス様はいったいどうして十字架の上で戦いをなさらなければならなかったのでしょうか。私たちを解放するためです。私たちは、もともと罪によって悪魔の強力な支配の下に置かれていました。

イエス様の贖いのみわざを受け入れていない人は、全て恐ろしい悪魔の支配下に置かれています。悪魔に対して応じることは、主に対して「否」と言うことです。罪を犯す者は、罪の奴隷であり主なる神の敵です。「新しく生まれ変わっていない人は悪魔の国にいる」とあります。

ある者が、自分の国の国境を越えて別の国に行けば、必ずその国の支配に服さなければなりません。罪とは悪魔の国に入り込んでしまうことを意味しています。ですから、誰もイエス様なくしては悪魔の支配下におかれ、悪魔に引き渡されてしまうのです。

聖書は、悪魔の現実とやみの世の力についてはっきりと記しています。エペソ人への手紙の中で、「格闘」、或いは、「戦い」という言葉がでてきます。

エペソ人への手紙 6章12節

**私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。**

「血肉に対する」とは、すなわち、「人間に対する」ということです。

毎日覚えるべきことではないでしょうか。私たちの戦いは、悪魔、悪霊に対する戦いです。占い、星占い、霊媒などをする者、或いは占ってもらう人は、強い悪魔の力に縛りつけられているのです。このようなものによって、どれほど多くの人が悩み苦しんでいることでしょうか。

悪魔の王国における人間の状態は、絶望に満ちたものです。現代人は悪魔による束縛を隠そうとしますが、結局何らかの形で縛りつけられ、自由を失っているのです。神なき者は束縛されている者です。主を知らない人は、好むと好まざるとに関わらず、罪を犯してしまうのです。「救い」や「解放」はあるのでしょうか。悪魔よりも強いものがあるのでしょうか。

私たちの福音は、これに対して「イエス様こそ悪魔に対する完全な勝利者である」ということです。イエス様は、全人類を恐ろしい悪魔の支配下から解放してくださいました。奴隷の状態から解き放たれるためには、尊いいのちが与えられなければならなかったのです。悪魔は権利を持っていませんでした。イエス様の聖なる自由ないのちが捧げられなければならなかったのです。

イエス様が地上に来られたことは、悪魔の奴隷を解放するために必要不可欠なことでした。そしてイエス様をご自身のいのちを捧げてくださったことによって、全人類は買い取られたのです。イエス様の血はイエス様のいのちでした。イエス様が血を流され、いのちを与えてくださったことによって、尊い代価を支払われたのです。

この代価について、パウロはコリントにいる兄弟姉妹に書いたのです。よく引用される箇所です。コリント第一の手紙6章19節と20節をお読みいたします。パウロは、「忘れたのですか？」と質問しています。

コリント人への手紙・第一 6章19節、20節

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

似ているみことばは、ヘブル人への手紙の2章に書かれています。イエス様の来られた目的について。

ヘブル人への手紙 2章14節、15節

そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。

これこそが、主イエス様の大いなる血の力です。これこそ悪魔の請求書に対する領収書であり、そのためもはや悪魔は私たちに対して何の権利も持っていません。イエス様は、悪魔の手から私たちを解放するために、悪魔に対して完全な勝利を治めてくださいました。悪魔と悪魔の軍勢に対する完全な勝利は、イエス様が墓からよみがえられ、闇の世の主権者を捕虜にし、私たちをキリストの凱旋に伴いゆくことによって成就されました。

コリント人への手紙・第二 2章14節、15節

しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます。私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神の前にかぐわしいキリストのかおりなのです。

イエス様は勝利者であるということは、イエス様を信じる者たちの喜ばしい証しです。悪魔は敗北の敵となりました。悪魔は、もはやいかなる人間に対しても何の権利も持っていないのです。

これこそ、「悪魔に対する主イエス様の完全な勝利」の事実です。イエス様の勝利は、私たち一人一人がいかに体験することができるのでしょうか。

全ては私たちとイエス様との関係、私たちの態度にかかっています。私たちにとって決定的な問題は、この勝利者であるイエス様に対して、私たちがどのような態度をとっているかということです。

イエス様の血によって誰も悪魔の支配下から解放され、イエス様の御国に移されるのです。コロサイ書の1章13節を読むと、次のように書かれています。

コロサイ人への手紙 1章13節

**神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。**

「私たち」とは、「信じる者」です。

いつか移されるであろう、ではなく、すでにしてくださったのです。何という勝利のみわざでしょう。イエス様の血によって、私たちは悪魔の支配下から解放されただけではなく、悪魔の攻撃から守られるのです。

イエス様の血は、私たちの盾として、いかなる悪魔の攻撃からも守ってくださいます。イエス様の血によって、私たちの咎、債務がなくなり、罪が赦され、完全な守りが約束されているのです。

よく知られている箇所ですが、最後にこれを読んで終わりましょう。

ヨハネの福音書 8章12節

**イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」**

やみの中を歩くことは、不安と危険を意味します。しかし、世の光であるイエス様を知っている者には「平和と安全」があります。

もしも、私たちに本当の平和と安全がないなら、そのままイエス様のみもとに来てください。イエス様は一人一人を心から愛しておられるお方であり、イエス様はあなたの闘いも悩みも全部知っておられるお方です。イエス様はあなたがいかに孤独であり、傷つけられたかをももちろん知っておられます。もう他人を見ないで。(イエス様がここにおられ、受け入れてくださると約束しておられるのですから。)

イエス様が提供された贈り物を受け取ることによって、全く新しい人生を歩むことができます。これこそ一番大切なことではないでしょうか。

了